

償いの問題

カルデシズムでは、霊は創造されたとき無垢なる存在だったが、輪廻転生するあいだに神から与えられた自由意志によって過ちを犯してきたという。カルデシズムでは過ちを「負債」と呼び、人間は「負債」を返済する、つまり過ちを償うために「地上界」に生まれてきたと教える。前号で記したように、この世（「地上界」）が「償いと試練の世界」だと理解されるのもそのためである。とするなら、人間の苦しみの原因は自身の「負債」にあるがゆえに、苦しみとはそもそも自分の魂が生み出したものだということになる。

一方、人生の苦しきは神の恩寵として理解されるという。そのことをカルデックは、「今、神は汝らの負債を返済するよう促して下さっており、それは将来の安心を確約して下さるためのものである。苦しみを通じて負債が軽減されることを喜ばなくてはならない (Kardec 1993: 68)」と説いている。また、苦しみや試練が大きければ大きいほど、それを乗り越えることができるのは多大な栄光だともいう。そこで大切な心構えは、懺悔の心と謙虚さだとされる。彼の言葉は次のように続く。「友よ、勇気をもて。イエスが汝の手本である。イエスは懺悔しなければならぬ理由はなにもなかったにもかかわらず、誰よりも苦しめられた。汝らよ、過去を償い、将来を確かなものにせよ。忍耐強くあれ。クリスチャンたれ (Kardec 1993: 107)。」

ここで興味深いのは、カルデックが用いる「クリスチャン」という言葉の意味である。というのも実はそれが必ずしもキリスト教信者を指しているわけではないからだ。カルデシズムの信奉者（以下、カルデシスタ）において、イエスはもはや神というよりも、極めて神に近い上級霊の一人である。彼は「天界あるいは神聖な世界」に到達した存在だとされ、その意味でイエスには神性が認められるものの、神そのものではないのである。とすれば、イエスはさしずめ「神に近い存在」として信仰者の理想像に位置付けられることになる。

聖書には、「わたし（イエス）は道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない (ヨハネ 14:4-6)」とある。カルデシスタらは自身の霊を進化させようと心がける過程において徳高きイエスを求める。彼らはイエスを人生の試練に耐えた理想の人間像とみなし、その姿に学ぶ者をクリスチャンと呼んでいるのである。カルデシスタらはイエスに救済を求めるわけではない。その意味でカルデシズムはキリスト教会の教えを相対化する。

自由意思と救済の方法

カルデシズムでは、救済は他者がもたらしてくれるものでなく、自ら導くべきものと考えられている。自由意志は霊（人間）に「負債」を担わせる原因になるが、それを取り除くことも可能にする。個人が救済されるか否かは全て個人の自由意思にかかっているということなのである。この自由意思という教えは、個人の償いと救済の方法、そしてカルデシズムの組織のあり方を規定している。

カルデックは次のように言う。「人間は他人を成長させることはできない。自分自身を高めることだけである。人間には純

化した霊たちの世界に近づく恒常的な努力が期待される。その作業は苦悩ではない。それは、自身をそれら上級霊のようになろうとさせる熱意に満ちた崇高な希望である (Kardec 1993: 47)。」ここには過去の過ちを償うことは大切だが、誰かに贖ってもらえるものではないという認識がある。償いは自己責任のもとでなされるべきだと考えられている。

では、カルデシズムにおける救済はどのような方法によるのだろうか。カルデシスタらは「慈善活動の外に救いなし」と表現して他者に尽くすことを強調する。負債の償いは他者救済という活動によってのみ達成されるのである。これは、「教会の外に救いなし」と唱えた初期キリスト教の司教キプリアヌスの言葉に基づいているとみられるが、教会という一つの制度に帰属することによってのみ恩寵がもたらされるとする考えを批判したものとも理解できる。カルデシズムが生まれた19世紀のヨーロッパは、さまざまな社会制度を整備して、それらを細分化させていった時代である。同じ時代にカルデシズムのように「個」を重んじながら制度からの脱構築を目論んだ運動が生まれたことは興味深い⁽¹⁾。

さて、ブラジルにおける慈善活動の具体的な内容については後述することにして、ここではそれらが観念的にどのように理解されているのかをまとめておこう。慈善活動は、自らの過去の、あるいは前世の負債を支払って救済に至るための一つの方法とされる。個々の実践を通じて本人が努力を重ねることで神から「徳」⁽²⁾が与えられるという。地上界での試練に耐え、慈善活動による負債の償いをして、徳を蓄えることが「霊の進化」を早めてその者を救済に導く。救済は、あくまでも自己を律する個人の努力に求められるのである。また、徳を授かるには、物質欲からの脱却が必要だとされる。カルデックは言う。「この世で高い地位を求めてはならないし、他人を踏みつけての上がるようなこともしてはならない。むしろ、もっとも貧弱で慎ましい地位を求めよ。というのも神は徳ある者に対して、天（霊界）で高い地位を与えるからである (Kardec 1993: 89)。」

自律的個人による組織

カルデシズムの組織は、自由意思を持ち自律的に行動する個人によって運営されることが想定されている。カルデシズムでは個人の自由意志と自律性が尊重されるため組織への個の帰属は強要されない。そのため、組織や集団は「ゆるやか」に結ばれる。それゆえ社会学者デイビッド・ヘスは、彼らの組織は分裂しやすいという。事実、メンバーがセントロと呼ばれる活動拠点を離れ、独自に新しいセントロをつくることはしばしばみられる。セントロ間の情報交換の度合いは、それぞれの拠点で異なる。組織の連盟は存在するが、そこへの帰属は義務づけられない。カルデシズムでは集団への帰属は個人の「霊の進化」のレベルに応じて自由に行われるものであり、強制してはならないと考えられているのである。

[註]

- (1) カルデシズムのキリスト教からの脱制度化の傾向は、例えば、セントロに礼拝対象を置かず、定まった儀礼もなく、聖職者を持たず、メンバーを拘束する上下関係もないというところにあらわれている。
- (2) ポルトガル語ではメレシメント (merecimento: 「値するもの」という意味) と言われる。